

エイズの影響を受ける子ども支援： 子どもケアボランティアの育成

ドロップインセンターに通う子どもたちのなかにはHIVに感染した子どももいます。また、若い世代への感染を防ぐためには、ボランティアたちがHIV/エイズそのものや治療法についての知識を身につけ、予防啓発活動を行っていくことが重要です。子どもケアボランティアを対象に、HIV感染経路や感染後の体の変化、ARV服薬法を学ぶためのエイズ治療研修を実施しました(左上写真)。また、子どもが抱える問題を早期に発見、問題解決に結びつけるためのカウンセリング研修(右上、左下)や緊急時に対応するための救急法研修(右下)を実施しました。



ARV（エイズ治療薬）の服薬方法について学ぶボランティアたち。



中心にいるのは母親を亡くし、おばあちゃんと暮らす子ども。この子がコミュニティの中から得られるサポートは？それぞれ、学校の先生、警察官、DICボランティアなどと役割とできるサポートをあげ、子どもを守るウェブが広がっていく様子を体験しました。



最終テスト前に、みんな真剣な様子でノートを書き写す。



止血、骨折の応急法などに触れました。頭の怪我、足を骨折してしまった人を応急処置のあとリラックスできるポジションにつける練習。講師がやると簡単そうでも、実際にやってみるとなかなか難しい。

エイズの影響を受ける子ども支援：経験交流など

エイズの影響を受ける子どもの支援として、活動9村のうち3村にある子どもケアセンターに通ってくる子どもを直接対象とした活動も行っています。3村間の経験交流(左上、下)キャンプやセンターにおける菜園研修(右上)の実施のほかに、研修を通じて地域における自分たちの役割を実感するようになった子どもケアボランティアによる子ども宅訪問&インタビューを通じての子どもの状況把握調査(右下)なども行っています。



経験交流キャンプで拾うされたお芝居のワンシーン。服もボロボロで学校に行かせてもらえない子ども。いつも酔っ払っているお父さん。学校なんて女の子は行かなくていい！と、ぼっちゃりめのお父さん役の白熱の演技に笑いが絶えません。普段子どもたちが目にしている光景が劇に反映されています。お芝居は啓発活動も兼ねています。



4月には、子どもケアセンターでの菜園作り研修も実施し、約50人の子どもが参加しました。



村間経験交流の実施。伝統ダンスを披露する女の子たち。村で民族が違うため(ペンダ族、シャンガーン族)違うダンスも見られます。



子ども状況把握調査の様子。この家庭ではいろいろ聞いていくうちに5人兄弟姉妹のなかで一人だけ出生証明書を持たずに病院などでケアが受けられない子どもがいることがわかりました。ソーシャルワーカーなどにつないでフォローアップしていく必要があります。

家庭菜園研修

アパルトヘイト下で黒人社会における農業が破壊され、農村貧困地域では食べていけない人も多い南アフリカ。JVCが提供した有機農業研修を受け、実践を続けているアベル・コマネさんをトレーナーとして迎え入れ、家庭菜園研修を行っています。対象は、子どもケアボランティアセンターのボランティアを中心に、在宅介護ボランティアの一部、コミュニティの人が参加しています。資金供与前の現状把握調査、11月の座学、1～3月までのファシリテーター（各村でトレーナーとともに実践を広げていく人）養成研修を経て、4月からはコミュニティの人たちを巻き込んで研修を開始、その後はトレーナーがフォローアップ研修とモニタリングを続けています。



ドロップインセンターの敷地に菜園をつくります。果樹なども植え、環境の整備も行いました。



トレーナーのアベルさん（右）によるモニタリング。研修で学んだ内容の実践の定着を目指します。



子どもケアボランティアのフローレンスさん。左は研修直後の様子。数ヶ月後の8月には右の写真のようにたくさんの食べ物が取れるようになった。「お金を出して食べ物を買わなくても、自分で育てることができる。そして、健康にも環境にとってもその方が良い。それを多くの人に伝えていきたい」